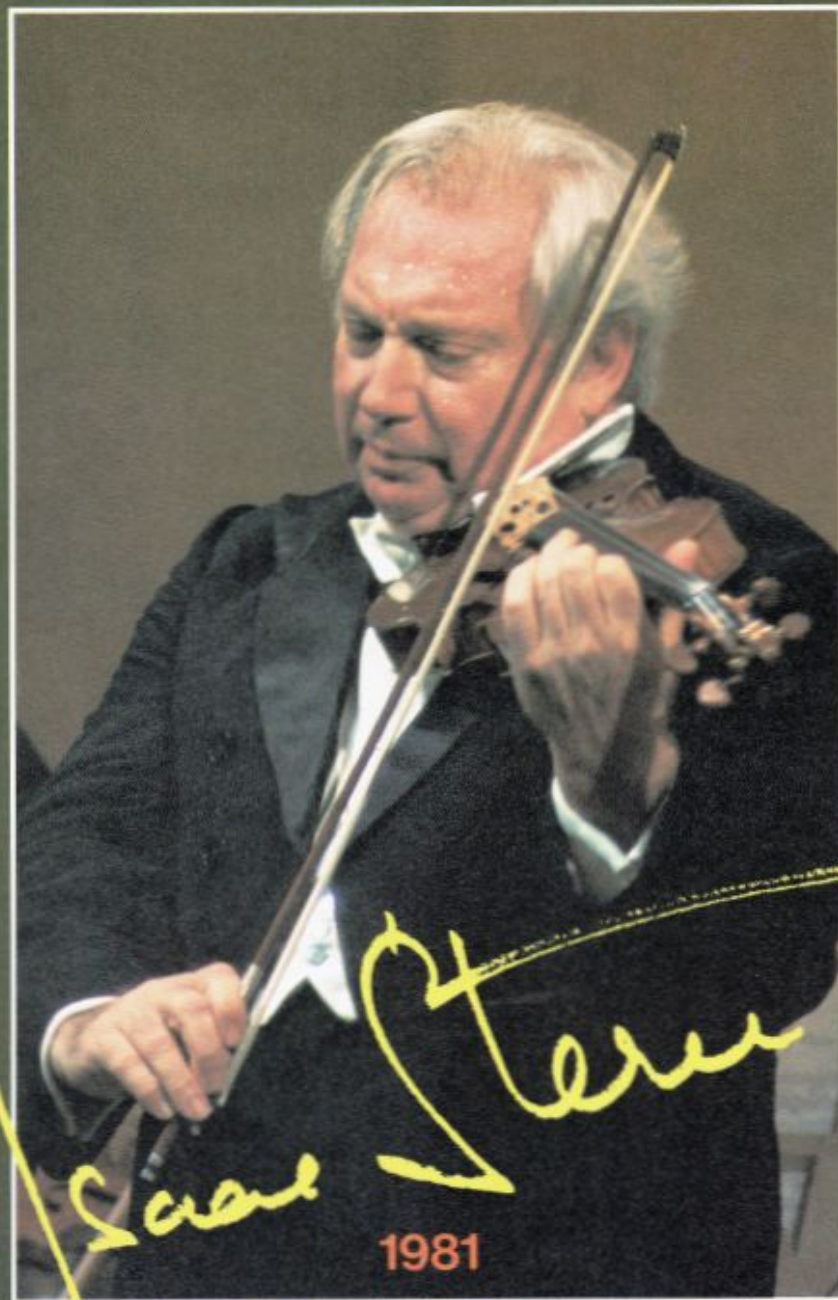


**ISAAC
STERN**

VIOLIN RECITAL 1981



アイザック・スターンは1920年7月21日、ロシアのクリミニーツで生れたが、1歳にならないうちに両親とともにサンフランシスコへ移住した。かつてペテルブルグ音楽院でグラズノフに学んだことがあり、プロコフィエフとピアノのクラスで同級であった母に、6歳の頃からピアノを習いはじめた。父もまたピアノをよく弾いた。2年後ヴァイオリンに変わり、奨学金を得て10歳からサンフランシスコ音楽院に入学、イザイの弟子であったパーシנגー、アウアーの高弟布林ダーに師事、ロシア楽派の正確無比な基本を学びとった。15歳でモントゥー指揮のオーケストラと協演してサンフランシスコでデビュー、1937年サンフランシスコをはなれてニューヨークへむかい、17歳でタウン・ホールにデビューしたスターンは、コンサート・ヴァイオリニストの道を歩みはじめた。

1943年1月のカーネギー・ホールでの大成功を境として、スターンの活動範囲はニューヨークだけでなく、米国内の各都市、ヨーロッパ、イスラエル、南米、オーストラリア等全世界へと広がっていった。1945年に、すでにアメリカで年90回のコンサートを

おこなう一流の演奏家に成長しており、コロムビア・レコードによって彼の名を知った各国から出演希望が集中した。

スターンは、1953年には世界一周演奏旅行を、1957～59年にはヨーロッパの9ヶ国を訪れ、有名な音楽祭にはほとんど招かれるなど、その名声は確固たるものとなった。

1961年、スターンはイスラエルでの初の音楽祭を開くために尽力した。そしてこの音楽祭にはパブロ・カザルス、ルドルフ・ゼルキン、ブダペスト四重奏団などが参加した。このイスラエルとイギリスで、スターンはピアニストのユージン・イストミン、チェリストのレナード・ローズとともにトリオの演奏会をおこない、批評家たちに「まさに歴史的な演奏」と激賞された。

またスターンは、1956年以来何回かソビエトを訪れているが、ダヴィッド・オイストラフとの親交は彼の死まで続き、スターンがソ連を訪れたとき、あるいはオイストラフがアメリカを訪れたときはいつも2人で一緒に演奏をしており、2人の二重奏曲のレコードも名盤として知られている。

スターンは1965年には30万キロを旅行し、3つの大陸で125回以上のコンサートを開き、1964年9月から1965年8月までの1年間に143回の演奏会をしたというように、年間平均150～200回という超人的な演奏活動をつづけている。その多忙な演奏活動の中で、アメリカ・イスラエル財団の主宰やカーネギー・ホール再建への尽力などその活躍は幅広く精神的である。

我が国へは1953年の初来日以来、1961、65、67、71、74、75、78、79年と9度訪れ、71年にはユージン・イストミン、レナード・ローズと共にトリオで来演、74年には独奏会の他、同時期に来日していたチェコ・フィルとベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を、翌75年にはN響とブラームスのヴァイオリン協奏曲等を、78年には秋山和慶指揮、桐朋学園オーケストラとの協演の他、来日中のユージン・オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団、また京都、名古屋、札幌の各地のオーケストラと協演した。

今回は各地での独奏会の他、東京、名古屋、札幌で東京音楽芸術祭のために結成したフェスティバル・アンサンブルと協演する。

アイザック・スターン
ISAAC STERN



Isaac Stern was born on July 21, 1920 in Kriminiesz, Russia. His parents brought him to San Francisco when he was less than one year old. At six, he began studying the piano, but two years later he switched to violin. Then, he began studying with teachers from the San Francisco Conservatory of Music at ten, and guest performances, in 1935, under Pierre Monteaux's direction followed as well as appearances with the Los Angeles, Portland, Seattle, Minneapolis and Chicago Orchestras.

The violinist was launched on the concert route after his promising New York debut in 1937 and his steady upward climb was followed with interest by critics from coast to coast. With his Carnegie Hall concert on January 12, 1943, he rocketed into the sparsely populated realm of first-flight violinists.

His summers are spent filling the demands from foreign countries where he has become known through his numerous records.

In August, 1953, Stern began a record-breaking around the world tour, and in 1957-1958, Stern went abroad for a combined vacation and concert which found him playing in nine European countries and at nearly every major festival. He plays well over a hundred concerts a season and appears annually with almost every major orchestra in the U.S. and abroad. In addition to all his concert activity, Stern plunged into another endeavor that year when Carnegie Hall was finally doomed to destruction and the various interested parties had given up hope of saving it. In swift maneuvers he got New York City to buy the venerable musical shrine and lease it to a nonprofit organization of which Stern is the President.

The summer of 1961 with pianist Eugene Istomin and cellist Leonard Rose he played Trio recitals in Israel and in Great Britain which critics labelled "historical."

Among Stern's extensive list of numerous recordings are several all-time best sellers, including the Tchaikovsky, Brahmas and Wieniawski concertos, pressing made at the Prades and Perpignan Festivals, double concerti made with David Oistrakh.



アンドリュー・ウルフ
ANDREW WOLF

アンドリュー・ウルフは音楽一家に生まれ、幼少の頃よりエレオノア・ソコロフとフランク・シェリダンについてピアノを学んだ。カーチス音楽院に進んだ彼は、ルドルフ・ゼルキン、ミェチスラフ・ホルショフスキに師事し、卒業後はニューイングランド音楽院のミカロス・シュワルプのもとで研鑽を積み、マスターの学位を獲得した。

1969年、ヨーロッパ・デビューを飾った彼は、「偉大なアメリカ人ピアニスト」(オスロ)と絶讃され、フィラデルフィア管弦楽団との協演では、「若きピアノの詩人」と称えられた。また一連のリサイタルに対しては、「空前のすばらしさ」(ワシントンD.C.)等、最高の讃辞が与えられた。リサイタルやオーケストラとの協演はもとより、室内楽でも活躍している彼は、サミュエル・アシュケナージ、レスリー・パーナス、ジョセフ・シルバースタイン、アーノルド・スタインハート、エマニエル・ボローク、フェルメール四重奏団等とも共演している。

1965年以来、ウルフはメイン州ロックポートに本拠地をおく夏期・冬期の室内楽連続演奏会であるベイ室内楽演奏会の芸術監督を務め、また同地における彼のめざましい活躍に対し、1972年度メイン州賞が与えられた。

1977年9月、ウルフはマサチューセッツ州ニュートンの地域音楽学校である、オール・ニュートン音楽学校の校長に任命された。また、ネイセル・ホールの夏期音楽ゼミナールの講師も務めている。

Andrew Wolf was born into a musical family and began studying the piano at an early age. His first teachers were Eleanor Sokoloff and Frank Sheridan. Later, he entered the Curtis Institute of Music as a student of Rudolf Serkin and Mieczyslaw Horszowski, and upon graduation went on to get his Master's degree at the New England Conservatory of Music where he worked with Miklos Schwalb.

In 1969 Andrew Wolf made his European debut and critics in the twenty cities where he played agreed that here was "a great American pianist" (Oslo Aftenposten). Critics in this country had called him "a young poet of the piano" (Philadelphia Inquirer) for his performance with the Philadelphia Orchestra. For his many recitals he was said to be "in a class quite by himself" (The Evening Star, Washington, D.C.). Included in recital and orchestral appearances have been many chamber music concerts with Shmuel Ashkenasi, Leslie Parnas, Joseph Silverstein, Arnold Steinhardt, Emmanuel Borok, The Vermeer Quartet, and many others.

Since 1965 Andrew Wolf has been Artistic Director of Bay Chamber Concerts, a summer and winter series of chamber music concerts that is based in Rockport, Maine. For his extensive work for music in the State he was awarded the 1972 Maine State Award.

In September, 1977, Andrew Wolf was appointed Director of the All Newton Music School, a community music school in Newton, Massachusetts.

Andrew Wolf is also on the faculty of Kneisel Hall Summer Music School.

アイザック・スターン ●1981年 日本公演

ISAAC STERN ●1981 Concert Schedule Japan

5月11日(月)7時	東京	昭和女子大学・人見記念講堂	リサイタル	主催＝(財)日本音楽芸術振興会・新芸術家協会
5月13日(水)7時	東京	東京文化会館	協奏曲	主催＝(財)日本音楽芸術振興会
5月14日(木)7時	松戸	聖徳学園・川並記念講堂	リサイタル	主催＝聖徳学園短期大学
5月15日(金)6時30分	名古屋	名古屋市民会館	協奏曲	主催＝中日新聞社・名古屋音楽協会
5月18日(月)6時30分	札幌	北海道厚生年金会館	協奏曲	主催＝北海道新聞社・UHB・道新文化事業社 協力＝日本航空
5月20日(水)7時	大阪	フェスティバル・ホール	リサイタル	主催＝毎日新聞社・大阪コンサート協会
5月21日(木)6時30分	金沢	石川厚生年金会館	リサイタル	主催＝北国文化センター・北国新聞社・北陸放送
5月23日(土)6時30分	福岡	福岡市民会館	リサイタル	主催＝テレビ西日本・西日本新聞社・福岡音楽文化協会
May 11 Monday	7:00p.m.	Tokyo	Hitomi Memorial Hall	Recital
May 13 Wednesday	7:00p.m.	Tokyo	Tokyo Bunka Kaikan	Concerto
May 14 Thursday	7:00p.m.	Matsudo	Kawanami Memorial Hall	Recital
May 15 Friday	6:30p.m.	Nagoya	Nagoya Shimin Kaikan	Concerto
May 18 Monday	6:30p.m.	Sapporo	Hokkaido Kosei-nenkin Kaikan	Concerto
May 20 Wednesday	7:00p.m.	Osaka	Festival Hall	Recital
May 21 Thursday	6:30p.m.	Kanazawa	Ishikawa Kosei-nenkin Kaikan	Recital
May 23 Saturday	6:30p.m.	Fukuoka	Fukuoka Shimin Kaikan	Recital

PROGRAM

ベートーヴェン
BEETHOVEN

ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ニ長調 作品12の1

Violin Sonata No.1 in D major Op.12-1

Allegro con brio

Andante con moto

Rondo: Allegro

ブラームス
BRAHMS

ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 作品108

Violin Sonata No.3 in d minor Op.108

Allegro

Adagio

Un poco presto e con sentimento

Presto agitato

バルトーク
BARTÓK

ヴァイオリンとピアノのためのラプソディ 第1番

Rhapsody No.1 for Violine and Piano

シマノフスキー
SZYMANOWSKI

「神話」 作品30より 第1曲「アレトウーザの泉」

“Mythes” Op.30-1 ‘Fountain of Arethusa’

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

4つのロマンティックな小品 作品75

“Four Romantic Pieces” Op.75

モーツァルト／クライスラー
MOZART／KREISLER

ロンド（セレナード 第7番「ハフナー」より）

Rondo from Serenade No.7 ‘Haffner’

クライスラー
KREISLER

前奏曲とアレグロ

Prelude and Allegro

私にしてみれば、アイザック・スターンの芸術的才能を称える事は愚かな試みである。私などより遙かに優れた音楽的学識を持った人々が、古今の偉大なヴァイオリニストの中でも一際傑出した存在として彼を位置づけてきた。それ故、人間として、また友人として、という立場で彼について述べたいと思う。

アイザックとは20年来の付き合いである。音楽家としての彼となればさらに古くなる。サンフランシスコに居た頃、15歳の彼のデビューをはっきりと覚えている。それ以来、私はおよそファンの持つ最も激しい情熱を捧げながら、彼の成功を見守り続けてきた。だから、とうとう彼に会えた時の喜びはこの上ないものだった。私にとっては、ヴァイオリンに生命が吹き込まれたのと等しかった。私の家のスピーカーから流れる美しい音楽の中で、その男は私の前



スターンの素顔
■デイビッド M. ジョーンズ

にいたのであった。

私達は親交を結んだ。彼が優れた音楽家であると同時に、優れた人間である事はすぐに理解できた。すべての音楽家に対して、このような評価が値するわけではない。私がパン・アメリカン航空を退職した時、彼は私の将来を安じ、どうしたら役に立てるかを知たがった。大丈夫だよと私が受け合った時、彼は胸を撫でおろしたものである。偶然ロンドンに居合わせた時には、忙しいスケジュール、それに活発な文化の中心地に来訪した芸術家として当然甘んじなければならない多くの義務にもかかわらず、彼はわざわざ私に会いに来てくれた。私は彼の親友の一人だなどと考えるつもりはない。もし自分の立場を云々しなければならなかったら、世界中にいる彼の無数の友人の一人としか考えないだろう。アイザックが私に対する姿勢は、単に彼が友情というものをいかに大切にしているかを示唆するにすぎないのである。

アイザックに関する楽しい発見の一つに、彼が並みはずれた食通だということがある。楽しいというのは、単に私がその道に通じているという自負のためばかりでなく——食通というのは類は友を呼ぶものである——彼が実によく、うまいもののある場所を知っているためである。彼と一緒に昼食や夕食に出るのは、素晴らしい食べ物の世界への常にわくわくする冒険なのである。私はいいレストランをよく知っていると云われるが、彼は私に有名であろうがなかろうが、食通の間では最もおいしい焼鳥屋や寿司屋を紹介してくれたし、また多くの愉快的な中華飯店にも連れて行ってくれた。

もしここで、私が避けようと約束した事柄、つまり彼の芸術性について少しでも触れることが許されるならば、彼のユーモアのセンスと人生を享受する

趣味とが、彼の演奏に反映しているということを認めておきたいと思う。彼の演奏している姿にもそれが認められるし、NHK 交響楽団とのリハーサルの中で、それらが生き生きと現われているのを見たこともある。その時はモーツァルトのある作品を練習しており、丁度ヴァイオリンセクションとソロが数小節の間対話するようにかけ合いをする楽節にきていた。アイザックがその箇所を愛しているのは明らかだった。ヴァイオリンセクションがある1節を弾くと、次に微笑をたたえた彼が繰り返して追いかける。モーツァルトが作曲した時のように、彼が演奏を楽しんでるのが見てとれた。それは音楽における「真似っこ遊び」だった。ただ私の印象を許してもらえば、そこにはまたほんの少し「何をやってもぼくの方がうまいよ」といった遊びの要素も入っていたようである。

アイザックについて述べる際には、その他の美点も見逃すことはできない。彼の利己心のなさや探求心、古今にわたる博識、同僚に対する思いやり、偉大な人道主義などはそれらの中に数えられるだろう。

最後にもう一つ例をあげるとすれば、昼食を共にするためにホテルを訪ねた日の事を思い出す。私がホテルに着いた時、彼は少し遅れるかもしれないと言った。日本の若手ヴァイオリニストの演奏を聴いてあげる約束をしていたのである。オーディションを終えて部屋から出てきた彼は、悲しそうに首を振った。

「どうも彼には才能が乏しいようだ。でも私に何が言えるだろう」

「それで、彼にどう言ったんですか」

すると彼はこう答えたのである。

「努力を続けなさいと言ったんだ。何といっても、希望というものは常にあるものなのだから」

David Mifka Jones (1915-2005)
パンアメリカン航空元極東地区広報担当支配人